

古代史教養講座 創立1995

松戸市常盤平 2-18-9

〒270-2261 電話 (047)384-5728 <http://www.geocities.jp/kdil1995>
振込銀行口座 三井住友銀行 飯田橋支店 普通預金 6355550 口座名・古代史教養講座**当会ゼミは来年2月も休講します****当号は都合により2頁となります**

明けて、おめでとうございます。

2019年に新型コロナの存在が明らかにされてから、3年目に入りました。さて、昨年11月末からオミクロン株が世界的に流行となり、現在の世界の感染者は3億人を突破し、死者は540万人以上に達しています(1月7日現在・J・ホプキンス大集計)。日本も1月に入って急増し、感染者は175万人、死者は18千人以上となりました。日本医師会は第6波突入との見解を示しました。従って、当会は2月も大事をとって休講とします。オミクロン株についての世界の知見は下記の通りである。

- 1、感染力はデルタ株に比べて3倍以上と強力で、感染してから発症する迄の潜伏期間は3日程度で、デルタ株(4日間)より短く、早く広がる。(米 CDC)。
- 2、オミクロン株感染者の死者は、300人当たり1人だが、インフルエンザは千人当たり1人で、風邪並みではなく油断は禁物である。尚、日本でのオミクロン株感染のピークは2月と予想する(長崎大・森内浩幸教授)。
- 3、毒性は、鼻や喉といった上気道の炎症を引き起こしやすいが、他のウイルスに比べて肺迄達して重症化するリスクは低い。但し、ワクチン接種者には重症化が少ないが、未接種者は重症化する(WHO)。英国(2回接種71%・3回接種52%)のイングランドで感染が確認された212千余人の中で、入院は981人、死者は75人となっている。(英保健当局)。
- 4、ワクチンの効果(英保健当局)

①mRNA ワクチン(ファイザー社・モデルナ社)を2回接種後のブレークスルー感染防御効果は、接種後2～4週間後で65～70%だったが、20週を越えると10%程度まで下がった。

②ファイザーのワクチンを2回接種した人が、3回目をファイザーかモデルナで追加接種すると、接種後2～4週間後には発症防御効果は65～75%に上がった。但し、5～9週間後では55～70%に、10週超えると4

0～50%に下がった。

③入院を防ぐ効果は、2回接種後24週以内では72%、25週以上になると52%まで低下した。3回接種では2週以上経過すると88%まで上昇した。

5、オミクロン株感染の症状

- ①東京都内での感染者115人の症状は、24人(21%)は無症状で、残り91人は発熱、咳、喉の痛み等で軽症だった。中等症や重症者はいなかった。
- ②沖縄県での感染者50人の症状は、発熱36人、咳29人、倦怠感25人、喉の痛み22人、鼻水・鼻づまり18人、関節痛12人で、無症状は2人だった。

『沖ノ島祭祀と天岩戸の謎に対する新たな発見』—魏の使いは日食の確認に来た!—

: 槌田 鉄男会員記

玄界灘に浮かぶ沖ノ島は古墳時代から平安時代初めまで数百年に渡って国家祭祀が行われてきました。そして祭祀にまつわる遺物・遺構と共に島全体が世界文化遺産となっています。しかし、半島と九州間の航路から大きく外れ、人が住めないこの絶海の孤島で何故このように重要な祭祀が行われてきたのか、それは長きに渡って大きな謎となってきました。

福岡市で中学校の理科教諭をされている淤能碁呂(オノゴロ)太郎氏は同じく玄界灘に浮かぶ小呂島(オロシマ)に赴任されていた当時、そこにヤシ科の植物ビロウが自生していることに気づき、ビロウが天皇家の祭祀と密接な関係があることから、この小呂島こそ国生み神話で知られるオノゴロ島ではないかとの仮説を立て、その証明に取り組んで来られました。そして一昨年暮れに2度目の本となる『古事記・日本神話の故郷は北部九州だった』を出版されたのです。ちなみに沖ノ島はこの小呂島のさらに北の沖合に位置しており、ビロウの自生地としては北限になります。

氏はその本の中で沖の島の祭祀の起源は247年3月24日にこの島で起こった皆既日食に起因したものであり、卑弥呼がこの島で皆既日食の時、春分の祭祀を行

ったことが天岩戸の伝承となり、それが数百年に渡ってとり行われる事になったのではないかと推察されています。又この時の日食は近畿では観測されていません。皆既日食は人が一生の間に遭遇するかどうかの珍しい現象です。しかも氏によればその時の日食は『皆既日没帯食』と言う非常に珍しい日食で、日没と重なり暗くなっただけで太陽が水平線に沈み、夜を迎えてしまった可能性が高いと言うのです。人々は朝になっても日が昇らずそのまま暗闇がずっと続くのではないかと恐れ、それが天岩戸伝説となり、沖ノ島はそれ以来特別な場所となって数百年に渡って祭祀が行われてきたと言う訳です。

この伝説の主人公となった天照大神のモデルは卑弥呼であると言う説はこれまで多くの方が述べられており、この話はその証拠となり得る大変興味深いものだと思います。沖ノ島で皆既日食が起きることを当時の日本人が事前に知る由もなく、春分の祭祀とは言え『王と為りてより以来、見る有ること少なり』と書かれている彼女が、わざわざ沖の島に出かけて行くことがあったのだろうかと思ひ、あり得ない話と受け止めました。そしてあったとしても、それは魏の使節に日食のことを聞いたからではないかと思ひウィキペディアで調べてみました。そうすると魏は景初元年(237年)から『景初歴』と言うものを使い始め日月食の開始時刻を正確に推算できる方法を初めて確立したとあるのです。

古代、暦を司ることは皇帝の最も重要な仕事のひとつであったことはよく知られています。そして日食は不吉なものとして非常に恐れられ、日食時に国家行事が行われなければ君主の尊厳が傷つけられ国が滅ぼされる前兆になるとされ、日食を予期することは皇帝の責務であり、紀元前 2000 年の夏の時代から戦国時代を通して日食予報の精度アップが図られ、遂に魏の時代になって正確に予報できるようになったと言う訳です。

魏の使いが倭国を訪れたのは景初が終わった正始元年(240 年)です。日食の正確な予報ができるようになって間もなくの事であり、淤能碁呂太郎氏がその後調べたところ 247 年の日食は景初元年以来、中国から玄界灘にかけて発生した初めての皆既日食だったと言うことが分かりました。そうすると魏の使節は景初歴の確かさを確認すると同時に、この日食において祭祀をさせる目的で卑弥呼を沖ノ島に行かせた可能性が濃厚になります。彼女は偶然行った訳ではないと言うことになるのです。

247 年から9年遡った景初2年(238 年)12月に卑弥呼の使節・難升米が魏の明帝に朝貢しています。私が拙著『九州の邪馬台国vs纏向の騎馬民族』の中で述べた自説ではその時の朝貢は扶余との攻防に対する支援要請であり、その要請に応じて正始元年に魏の使節が倭国を訪れることになったとしたのですが、その使節に天文学者が伴っていたと言うことになります。沖の島は魏の都・洛陽とほぼ同緯度です。その天文学者は 247 年に玄界灘の同緯度に当たる場所で皆既日食が起きることを予め知っていて、実際に観測できる場所がないか、祭祀を行える場所がないかを確認しに倭国に来たのではないのでしょうか。そして 247 年になったら沖の島に行き、祭祀を行うよう卑弥呼に指示したのだと思います。魏志倭人伝の記述は倭国の自然や風習などが実に詳細に書かれており、数多くの動植物名が記載されています。普通の役人のレベルとはとても思えません。私はこのことも予てより不思議に思っていたのですが、これでその謎が解けたように思いました。使節に同行していたのはただの天文学者ではなく、博物学者だったのかも知れません。

私は淤能碁呂太郎氏の小呂島＝オノコロ島説を聞いて自説の新しい騎馬民族説の中で騎馬民族・扶余が九州上陸のため最初に拠点としたのが小呂島だと思ひ、氏の説に興味を抱き続けてきました。今回の沖の島での皆既日食説が正しいとなれば拙著の一部を見直さなければならぬかも知れません。と言うのは私は拙著の中で扶余が半島のスタート地点としたと考える韓国の金海市の金官伽耶の遺跡と沖ノ島、そして当時は遠賀川河口近くにあった岡田宮(現在の神武天皇社)の三点が一直線に繋がるのが沖の島を祭祀の場所にした理由としているからです。

さてどちらが正しいのか、それとも両方とも正しいのか、247 年は一説では日本国家起源の年でもあり、また卑弥呼が死んだと思われる年でもあります。その事が沖の島の祭祀、すなわち、天岩戸の伝承とどう関係してくるのか好奇心が膨らむばかりです。 以上。

(参考文献)

- ・淤能碁呂太郎『古事記日本神話の故郷は北部九州だった』(株)ドリームキングダム 2020 年 12 月
- ・槌田鉄男『九州の邪馬台国vs纏向の騎馬民族』文芸社 2019 年 10 月
- ・淤能碁呂太郎『古事記日本神話の故郷は玄界灘の島々だった』熊本ネット(株) 2018 年3月。了。